

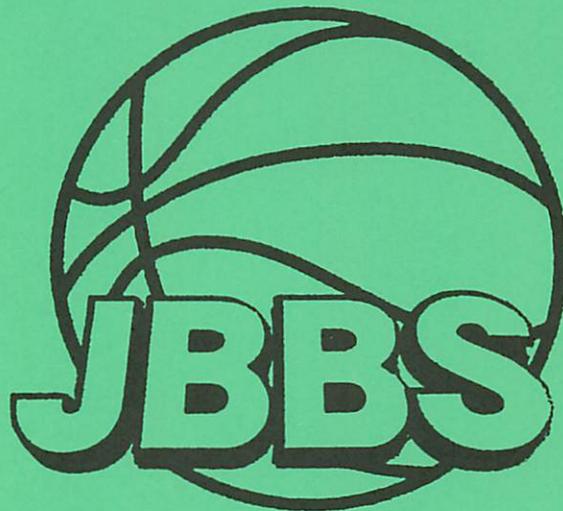
抜粋版

# バスケットボールプラザ

*Basketball Plaza*

No:58

---



2013年5月

NPO法人 日本バスケットボール振興会



センター街メイン通りは、

# BASKETBALL STREET

となりました。

渋谷センター街では、スポーツ振興と青少年の健全育成を基本理念に、国際色・ファッション性を考え合わせ、通りの名を「バスケットボールストリート」と命名。

5年、10年とかけてこのバスケットボールストリート、通称「バスケ通り」を定着させていきたいと考えています。



# バスケットボール ストリート



渋谷センター街

# BB



瞬発力が、加速する。

軽さとグリップ性を高めた新ソールで、よりクイックに。

## WAVE REAL BB3

ウエーブリアル BB3 13KL-24009 ¥13,650(本体 ¥13,000)

サイズ:23.0~30.0、31.0、32.0cm ベトナム製

※記載価格は、消費税込みのメーカー希望小売価格です。  
( )内は消費税抜き本体価格です。



# 目 次

- 理事会と定期総会を開催・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 全国シニア交歓大会 in YOYOGI・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16  
今年第6回目は2日間にわたって開催
- JBL最終章は大接戦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29  
4年ぶりにアイシンが優勝杯を奪還
- 人物抄  
住田 正二さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
- 昭和初期「明治大学籠球部のアメリカ遠征」・・・・・・・・・・歴史部・・ 35  
—— その1 企画、出発からアメリカ上陸まで ——
- 会員だより  
バスケットボール湘南だより（その2）・・・・・・・・・・中瀬達雄・・ 38  
シニアバスケットボールを楽しむ・・・・・・・・・・川戸政角・・ 40
- ハヤブサジャパン 男女日本代表強化再開・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
- バスケットボール書物紹介（マンガ本）・・・・・・・・・・須田武志・・ 44
- 訃報・事務局だより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
- プラザ こぼればなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

# JBL 最終章は大接戦

## 4年ぶりにアイシンが優勝杯を奪還

[編集部]

昨年10月に開幕したJBL2012～2013シーズンは、8チームによる6回戦総当りのレギュラーシーズンを終え、上位4チームがプレーオフへ進出した。今シーズンの特徴は、昨シーズン最下位だった東芝ブレイブサンダースの活躍である。レギュラーシーズンで早々と3位の座を確保し、セミファイナルでは2度にわたる延長戦を含めて3回戦まで持ち込んでトヨタ自動車を破ってファイナルへ進出。アイシンシーホースとのファイナルにおいても、最終5回戦までもつれ込む接戦を演じ、優勝こそならなかったがその活躍ぶりは称賛に値する。

また、リーグ戦の最後では、セミファイナル進出をかけて日立とパナソニックが競り合い、星2つの差で日立がセミファイナルの座を得た。

### <レギュラーシーズン順位>

順位	チーム名	勝率(勝敗)
1	アイシンシーホース	81%(34勝 8敗)
2	トヨタ自動車アルバルク	76%(32勝 10敗)
3	東芝ブレイブサンダース	69%(29勝 13敗)
4	日立サンロッカーズ	52%(22勝 20敗)
5	パナソニックトライアンズ	48%(20勝 22敗)
6	リンク栃木ブレックス	31%(13勝 29敗)
7	三菱電機ダイヤモンドドルフィンズ	29%(12勝 30敗)
8	レバンガ北海道	14%(6勝 36敗)

レギュラーシーズンベスト4による4月6日からのセミファイナル、4月17日からのファイナルでは熱戦が繰り広げられ、シーズンが閉幕した。

セミファイナルへ進出したのはレギュラーシーズン上位4チームで、アイシン対日立、トヨタ自動車対東芝が4月6日から対戦した。結果は下記の通りで、アイシンと日立はアイシンの一方的な勝利に終わったが、トヨタ自動車と東芝は第1戦、第2戦とも延長戦となり、1勝1敗の5分となって3回戦が行なわれ、大接戦の末東芝がトヨタ自動車を下してファイナルへ進出した。

### <セミファイナル結果>

- 第1戦 アイシンシーホース 71-56 日立サンロッカーズ  
第2戦 アイシンシーホース 72-37 日立サンロッカーズ

第1戦 第1ピリオドでアイシンの得点が伸び悩むうちに日立は、#5 スミスのダンクなどで加点し19対12で日立がリードしたが、終了近く竹内譲次選手が足の怪我で退場してからリズムが悪くなり、前半を終えて34対27でアイシンが逆転リードする。第3ピ

リオドに入りアイシンが小気味よく得点したのに対して、日立は苦戦を強いられてずるずると後退、このピリオドを終えて57対40とアイシンが大量リードする。第4ピリオドに入ると両者ともシュートが決まって得点の奪い合いとなるが、日立は大量リードのアイシンを追い上げるまでには至らず、結局15点差でアイシンが第1戦をものにした。

第2戦 エース竹内を欠いた日立は第1ピリオド好調な出だしを見せたが、第2ピリオドに入ると得点が止まり、このピリオドを6得点に抑えられ戦意消失の感、アイシンも一時得点が止まる時期があったが30対20で前半を終える。後半に入るとアイシンがインサイドを中心に得点したのに対して、日立は精彩を欠き30対51とリードをさらに広げられる。第4ピリオドでも日立はアイシンのディフェンスを攻めめぐみ7点という低得点で敗退、アイシンが連勝でファイナル進出を決めた。

第1戦	トヨタ自動車アルバルク	83-80	東芝ブレイブサンダース
第2戦	東芝ブレイブサンダース	78-76	トヨタ自動車アルバルク
第3戦	東芝ブレイブサンダース	64-62	トヨタ自動車アルバルク

第1戦、いまひとつ波に乗れないトヨタ自動車に対して、東芝はインサイド陣が活躍して29対20とリードし第1ピリオドを終了。第2ピリオドはロースコアとなったがトヨタ自動車が徐々に追い上げ、39対35と東芝4点のリード。第3ピリオドに入るとトヨタ自動車がバランスのよい攻撃で逆転に成功し58対56と1ゴールリードする。勝負となった第4ピリオド、東芝がリードしたがトヨタ自動車も固い守りから追い上げ、残り25秒で72対72の同点に追いつき延長戦へ突入。延長戦でも一進一退の攻防が続いたが、最後に東芝にミスが出て3点差でトヨタ自動車が勝利した。

第2戦、東芝は激しいディフェンスから得点を重ね第1ピリオド23対15とリード、第2ピリオドに入っても東芝の厳しいディフェンスが続き、前半を終えて40対30とリードする。第3ピリオドに入るとトヨタ自動車が攻守ともに冴えてあつという間に追いつき、以後は一進一退の攻防となって55対53とトヨタ自動車が逆転する。大勝負となった第4ピリオド、トヨタ自動車が一時リードを広げたが、東芝も残り3分から奮起、残り45秒で68対68の同点に追いつく。2試合連続の延長戦となった後は東芝が先行するがトヨタ自動車も入れ返して残り6秒で76対76の同点となる。タイムアウト後の東芝はフォーメーションから確実に得点し78対76で勝利、第3戦へと持ち越した。

第3戦は、第1、2戦の代々木第二体育館から東芝のホームタウン川崎に移って開催、この試合でファイナル進出が決まるとあってどちらも固くなり、ロースコアの展開となった。前半38対31とリードした東芝は、ホームゲームの後押しもあって第3ピリオドでも6点をリードする。第4ピリオドトヨタ自動車が反撃し1点リードするが、東芝も再逆転し大変な局面となったが、残り34秒東芝がフリースローによって4点リード、そのあとトヨタ自動車も得点するが逆転にはいたらず、1ゴール差で東芝がファイナル進出を決めた。

3戦中2試合が延長戦となったこちらのセミファイナルは実に見応えのある試合となった。お互いにベストを尽くした攻防は、多くのファンに感動を与えたが、特に最後まであきらめずに粘りのバスケットを展開した東芝の戦いぶりが印象的だった。

## <ファイナル結果>

4月17日から代々木第二体育館で開催されたファイナルでは、第1戦を終えた段階でアイシンの順当勝ちかと思われたが、東芝の粘り強い戦いで星は5分となり、最終の第5戦までもつれあう結果となってファンを魅了した。

第1戦	アイシンシーホース	77-71	東芝ブレイブサンダース
第2戦	東芝ブレイブサンダース	65-61	アイシンシーホース
第3戦	東芝ブレイブサンダース	74-67	アイシンシーホース
第4戦	アイシンシーホース	74-65	東芝ブレイブサンダース
第5戦	アイシンシーホース	58-54	東芝ブレイブサンダース

第1戦 試合開始早々両者ともやや固くなった展開だったが、すぐに馴れて前半は得点の入れ合いとなり大接戦になる。後半の第3ピリオドも同様の展開となったが、残り2分からアイシンが#2朝山の連続3Pなどで突き放し58対52の6点差とする。

第4ピリオドに入ってから東芝のミスもあって点差が2桁に開き、その後東芝必死の追い上げもあったが届かず最後は6点差でアイシンが初戦をものにした。

第2戦 第1ピリオドは両チームとも早い試合展開となり、17対15と東芝2点のリード、第2ピリオドでは東芝ディフェンスの頑張りによりロースコアとなって、前半を終えてアイシンが28対25の3点をリードする。第3ピリオドはお互いに点の取り合いとなったが、アイシンが外角シュートによって47対41と一歩抜け出す。大勝負となった第4ピリオド、アイシンのちょっとしたミスを逃さなかった東芝が肉薄し、残り44秒でついに56対56の同点に追いつく。試合はそのまま延長戦へ突入、両チームともファウルが5つとなってフリースローの成功率が鍵になる。一進一退の中残り1分をきったところで東芝が3点のリードを奪う。同点を狙ったアイシンだったが、最後にアイシンの司令塔#3柏木が5ファウル退場となって万事休す。東芝が4点差で激闘を制し1勝1敗とした。

第3戦 開始早々からアイシンが#3柏木の3Pなどで先制し、第1ピリオドは26対19でアイシンがリードし、第2ピリオドに入っても東芝の拙攻によって一時はアイシンが12点の差をつける。点差をつめたい東芝だったが速攻に対するアンスポーツマンライクファウルなどもあって前半40対32でアイシンがリードする。第3ピリオド早々東芝が怒涛の攻撃により開始2分で逆転に成功する。その後はお互いにミスも出て大量リードには至らず52対51の1点差で東芝が僅かにリードする。第4ピリオドどちらも譲らない点の取り合いとなったが、中盤東芝の厳しいディフェンスによってアイシンの得点が止まったあと東芝が7点差として一歩抜け出す。アイシンは残り38秒で65対69と4点差に詰め寄りファウルゲームをしかけたが、アンスポーツマンライクファウルを取られた上、東芝にフリースローで引き離され、67対74で敗れた。東芝はこれで優勝に王手をかけた。

第4戦 後がないアイシンだったが、ディフェンスファウルがブレーキとなって東芝が7点差で第1ピリオドを抜け出す。第2ピリオド、アイシンが東芝のディフェンスに手を焼き、東芝が一時9点をリードする。東芝は前半終了間際1分間で7点を取ったアイシン

の猛攻撃で36対32の4点差となるがリード。第3ピリオド激しい点の取り合いとなったが、リバウンドを頑張ったアイシンに流れが傾き、アイシンは、東芝が4分間ノーゴールの間にも得点し、一時10点の差をつける。しかし東芝もここから#14 辻のシュートなどで反撃に転じ、50対52の1ゴール差に詰め寄った。第4ピリオド東芝は#14 辻、アイシンは#32 桜木の奮闘で激しい攻防戦となる。中盤東芝にミスが続いた際に一歩抜け出したアイシンは、残り4分で62対57と僅かにリードした後、またもや#32 桜木の活躍で8点のリードを奪う。得点が伸びない東芝はファウルゲームに出るがアイシンにフリースローを決められて及ばず、アイシンが74対65で勝利して、ファイナル戦は第5戦までもつれこんだ。

第5戦 この1戦で今シーズンのチャンピオンが決まるとあってか、両チームともに固さからかミスが出てロスコアのゲームとなる。第1ピリオドは17対15とアイシンのリードで終わったが、第2ピリオドに入ると両チームともに得点が奪えない時間帯が生じる。結局このピリオドではアイシン9点、東芝は10点と云うロスコアに終わる。第3ピリオドに入ると様相は一変し、お互いにミドルシュートをよく決め激しい点の奪い合いとなり、このピリオドを終えて得点は44対43とアイシン1点のリード。第4ピリオド、アイシンは#32 桜木の得点でリードを広げると、#3 柏木の勝負強い3Pシュートなどで残り4分に56対49と東芝を引き離す。その後は東芝が粘りのディフェンスで食い下がって、残り1分で3点差とする。残り15秒東芝は#22 ファジーカスがフリースローを得るが1本しか入らずアイシンボールに。東芝のファウルゲームによるアイシンのフリースローは、#3 柏木がしっかりと2本決めて58対54でアイシンが勝利し、4年ぶりの優勝を飾った。

JBLとしては最後のプレーオフファイナルは第5戦までもつれこんだが、冒頭でも述べたように、注目すべきは昨シーズン最下位だった東芝の粘りある戦いだった。最終的に優勝までは届かなかったが、諦めずに全員バスケットで粘り強いディフェンスを中心とした戦いぶりには拍手を送りたい。最近のシーズンでファイナルが第5戦までもつれこむケースが少なかつただけに、ファンにとっても見応えのあるシリーズあった。なお、ファイナルのMVPはアイシンの#32 桜木が獲得した。

これで2001年から始まったJBLは一旦終了し、今2013シーズンからはNBL（ナショナルバスケットボールリーグ）として再編成され、新たなトップリーグがスタートする。

NBLには現在12チームが参加し、東西2つのカンファレンスに分かれてレギュラーシーズンリーグ戦を行うことになっているが、その中には相手カンファレンスチームとの交流戦も含まれる。

各々のカンファレンスで戦った後、上位3チームずつによるプレーオフ（クォーターファイナル、セミファイナル、ファイナル）を経て優勝チームが決まるが、これまでになかったチームや選手の顔触れも登場し、興味あるトップリーグとなりそうだ。また、外国籍選手については1チーム2名までで、第1、第3ピリオドはオンザコート2名まで、それ以外はオンザコート1名に制限される。

なお、このトップリーグの日程は次号に掲載する。

## 人物抄

編集部では、振興会会員でこれまで多々功績があった方にスポットをあてて、皆さんに紹介するシリーズを始めます。その第1回目として住田正二さんにご登場いただきます。

### 住田 正二 さん



住田さんは、大正11年(1922)5月、神戸のお生まれで今年91歳を迎えられ、お元気である。平成9年(1997)から平成17年(2005)まで、8年間にわたって日本バスケットボール振興会の会長を務められた。その頃振興会はNPO法人格を有しておらず、任意団体の形態でバスケットボール界において活動していたが、住田会長は常々バスケットボールをもっと発展、振興させるためにはどうしたら良いかを念じておられたお一人だった。

昭和62年(1987)、日本の国鉄が分割民営化された際に、住田さんはJR東日本の初代社長として、元運輸省(現在の国土交通省)事務次官を経験されたことなどから抜擢され就任、民営化が軌道に乗るべく大変なご苦勞をされた。国鉄はそれまで大幅な赤字続きで運営され、民営化によってこの赤字が解消されるのかと世間の注目を浴びたが、鉄道会社の技術向上に力を入れた結果、従業員が半減したにも関わらず労働時間は減少すると云った結果となって、JR東日本は黒字転換し、以来今日のトップ企業となっている。

住田さんは社長勇退後も新宿にあるJR東日本本社へ最高顧問として出勤され、経営の重要事項についてご活躍された。現在でも相談役として毎週3日ほどご出勤されている。

住田さんがバスケットボールを始められたのは、成蹊中学2年生の頃と承っている。当時の学校制度は尋常小学校6年、中学校5年、高等学校3年を経て大学へ進む制度であった。小学校卒業後、住田さんが学ばれた成蹊は、中学から高校までの一貫校で、中学4年、高校が3年の7年制(一般的には8年制)で、珍しい学制だったという。

この成蹊高校には、当時として希少なトラスコンという体育館があって、天井が高く床も輸入した木材で作られた立派な体育館であった。高校に進まれた住田さんは、この体育館で放課後や日曜日に一人でも練習に励まれたそうである(トラスコンは現在でも学生の憩いの場として食堂などに使われていて歴史を感じさせる)。

成蹊高校のバスケットの歴史をさかのぼってみると、中学、高校合わせて7年制のため通常の一貫校に比べてバスケットの練習量が少なかったにも拘わらず、大学チームを破る強豪だった時代がある。それは昭和6年(1931)の全日本総合選手権大会決勝で立教大学を抑えて、高等学校としては初めての全国優勝を飾ったことで証明される。

住田さんが成蹊高校1年生だったとき、3年生に黒川さんという主将がおられたが、この黒川さんは後にバスケットボール界の発展に尽力され、住田さんに振興会会長に就任するよう要請した方である(黒川さんは現在故人)。

住田さんが成蹊高校で主将を務められたとき、インターハイ決勝で浦和高校に惜敗している。その時浦和高校にはセンターとして活躍した池田敏雄さんという選手がいた。この池田さんが市立一中(現九段高校)にいた頃、住田さんが成蹊高校に来るように強く働き

かけ、成蹊の入学試験を受けたが不合格となり、結果的に浦和高校へ進学してしまった。その池田さんが成蹊高校へ進学していたら、昭和初期に続いて再び成蹊高校の黄金時代が来たかも知れなかったという（池田敏雄さんは日本のコンピューター生みの親）。

高校卒業後は東京帝国大学へ進学されたが、この頃第二次世界大戦がはじまりバスケットをやる環境ではなくなり、大学では勉強一筋だったそうである。また在学中に戦争にも駆り出されて2年間軍隊生活を経験し、当時の朝鮮や満州にも行かされたが、内地防衛のため終戦時は内地におられたそうである。

東京帝国大学卒業後は運輸省に入られ、またバスケットを再開、昭和23年(1948)に福岡で開催された国民体育大会に東京選抜チームの一員として参加、圧倒的な強さで優勝している。この福岡国体へ向かう際の面白いエピソードが語り継がれている。運輸省におられた住田さんは福岡に向かう際に出張扱いとなり、当時の2等車（現在のグリーン車）に乗車したが、他の東京選抜のメンバーであった故丸山さんや池田さん（いずれも元振興会会員）たちは3等車（現在の普通車）だったとか。当時東京から福岡までは20時間以上を要しており、球友たちから「楽でいいな」とうらやましがられた。

仕事の都合で大阪に転勤された運輸省の課長時代、成蹊時代の良き試合相手であった神戸学士クラブに入れて貰って再び活躍。昭和25年に来日したハワイ・バスケットボールチームと西宮球場で対戦し、関西選抜軍の一員として活躍、この時の戦いぶりが毎日新聞に写真入りで報道されている。

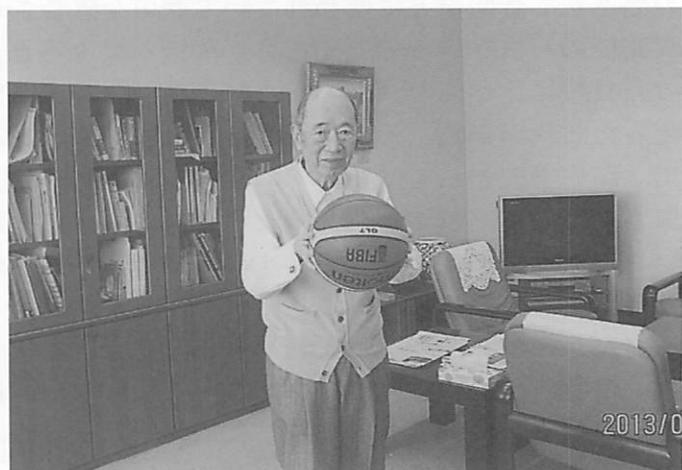
住田さんはご自身の持論として、オリンピックはアマチュア選手だけで戦い、プロ選手は世界選手権など別の場で戦った方がよいのではないかとよく語っておられた。振興会会長を務められていた頃、渋谷駅前のビルの一室を事務所として提供していただいたりもして、振興会の発展に寄与された。

東京大学ではバスケットができなかったという住田さん、ご本人は言わないが国際大会の選抜選手にも選ばれるなど、その技術は相当なものがあったとって過言ではない。

88歳の米寿を迎えられたときに経団連からお祝いに「杖」が贈られたと言って苦笑いされたほどお元気である。その元気の源は若い頃のバスケットに有るのかも知れない。

#### 住田さんの主な著書紹介

- ・官の経営 民の経営
- ・鉄路に夢をのせて
- ・役人につけるクスリ
- ・お役人の無駄遣い



# 昭和初期「明治大学籠球部のアメリカ遠征」

## —— その1 企画、出発からアメリカ上陸まで ——

[歴史部]

バスケットボールの創案者であるJ・ネイスミス博士が、明治大学のユニフォームを着た選手がバスケットのボールを持った姿と、一緒に写っている写真が「1932年アメリカ遠征の際バスケットの創始者ネイスミス氏にコーチを受ける」という説明付きで、明治大学バスケットボール70年史に掲載されている。しかしながら当時の明治大学籠球部がアメリカ遠征を実行した内容は明らかになっていない。

バスケットボールは明治41年(1908)大森兵蔵によって初めて日本に紹介され、その後神戸キリスト教青年会名誉主事として来朝したF・H・ブラウン氏によってYMCA(基督教青年会)にバスケットボールが運動として取り入れられた。そして大正10年(1921)には、第1回の全日本総合選手権大会が開催され、昭和5年(1930)に、大日本バスケットボール協会が創立された。日本協会50年史では、この時代を日本のバスケットボールの歴史の上で「伝播期」とし、それ以降戦前までを「揺籃期」としてとらえている。

「伝播期」では「ベルリン・オリンピックへの参加」、「アメリカチームの来朝」など新しいバスケットボールの知識を得るために、海外のバスケットボールチームと盛んに交流を行っていた。また、バスケットボールのチームの活動主体が、YMCAのチームから大学のチームに移行する時代でもあった。昭和2年(1927)には、早稲田大学がアメリカに遠征し、アメリカのバスケットボールを直接体験している。早稲田大学のアメリカ遠征については、同大学のOB誌「RDR50」や「RDR80」などに詳細に記録され、当時のバスケットボール界で学生が独自にアメリカ遠征を実行したことについて、社会から壮挙であると大きく報道、評価されている。

このような時代に明治大学籠球部は、大正15年(1925)早稲田大学、立教大学、東京商科大学、東京帝国大学などの東京学生リーグに加盟した大学であった。

昭和25年(1950)、戦後初めての国際試合であったハワイオールスターチームが来日した時のプログラムに、海外来訪少史として戦前の海外チームとの交流の歴史がまとめられているが、明治大学のアメリカ遠征についての記述はない。

明治大学籠球部のアメリカ遠征が、日本バスケットの歴史の記録から欠落していることは何故か不明である。明治大学籠球部が昭和初期にアメリカ遠征を行い、どのような体験をしたかなど、過去の資料によって全体の概要などがある程度解明できたのでここに報告してみたい。



### (1) 明治大学籠球部アメリカ遠征のメンバー14名

昭和7年(1932)1月19日に発行された「駿台新報」(明治大学新聞)第331号に籠球部渡米の記事があり、米国遠征の旅程と米国遠征選手氏名が書かれている。引率の教授は未定で、監督、副監督と選手12名、補欠6名の名前があり、写真には16名の人物が映っている。その氏名のうち明治大学70年史のバスケットボール部OB名簿に記録されている選手の人数は7名で、他の選手は正確に卒業しているかなど不明である。このOB名簿に選手の氏名が記載されていない理由についても明確でないが、アメリカに遠征した人数は当時の新聞報道でも14名であり、これらの記載から14名の参加者を推測してみた。

このときの駿台新報では、同伴する予定の教授は未定と書かれており、おそらく大学側として教授が遠征に同行した事実はないと推測される。

[推測される遠征参加者]

監督	鈴木 俊平	明治政経専門学校卒業生、28歳、読売新聞記者、和歌山県出身
副監督	鈴木 東平	明治政経専門学校卒業生、25歳
マネージャー	後藤 實	
選手	鈴木 酉平	政経学部3年、主将、23歳
	人見 眞一	政経学部2年、
	増田 貞造	商学部2年、23歳
	西脇 秀夫	商学部1年、20歳
	西川 喜代四郎	商学部2年、21歳
	高倉 正雄	商学部1年、
	近藤 朝吉	専門学校商科、22歳
	吉岡 太郎	専門学校商科、21歳
	筑紫 猷門	専門学校法科、19歳
	松本 太洋	法学部1年、21歳

昭和7年(1932)1月20日の午後4時から旧東京YMCAコート(神田美土代町)で、明治大学籠球部米国遠征送別試合が行われ、5大学連合軍との試合に前記の西脇、吉岡、鈴木、高倉、増田、松本、人見、筑紫、西川、近藤と10名の選手が出場し、55対42で明治大学が勝利している。従ってこの10名がアメリカ遠征に参加したことは確実視される。さらに駿台新報によれば、当時の豫科生6名の名前が補欠としてあり、このうちの1名がアメリカ遠征に加わったと思われる。

## (2) 明治大学籠球部アメリカ遠征の実現まで

昭和7年(1932)の学生リーグ戦において、東京大学リーグ戦講評の中で、「明治大学はアメリカ遠征という大望を抱いて各人が固くなり精神的スチールに陥っていた」と評されている。また、昭和8年(1933)に発刊された「籠球」には、「アメリカ遠征が目出度く実現したから遠征の土産をもたらすであろう雄姿をコート上に見る日を期待しよう」とも書かれているので、明治大学のアメリカ遠征の計画はかなり周知されていたことと考えられる。

昭和7年(1932)1月15日に開催された大日本バスケットボール協会の理事会で、

一、明治大学籠球部米国遠征の件

二、後援のため送別試合を挙行 明大遠征軍対五大学選抜軍

の2つの議題が決議され、正式に明治大学籠球部のアメリカ遠征が承認されている。

昭和7年(1932)11月に発行された駿台新報には、籠球部渡米、新味を輸入し旧技を打破せんと米国西部で三十有余の試合、との記事が掲載され、アメリカ遠征旅程とその選手氏名も掲載されている。この渡米計画は、当時監督だった鈴木東平氏が卒業する3年位前から計画されていたのではないかと想定され、12月4日には籠球部後援会主催による映画と音楽の会が日比谷公会堂において昼夜2回にわたって催されていたことも記録に残っている。この催しは明治大学籠球部米国遠征資金募集と銘打ち、“若人の集い”としても人気を呼び映画、音楽、舞踊などのほか淡谷のり子さんの独唱も行われ、日比谷公会堂管理部の調べによれば1回に1700名程度の入場者があったとされている。更に12月8日の読売、朝日新聞の朝刊には明大籠球部渡米の記事もある。

### (3) いよいよアメリカに向けて出発

明治大学アメリカ遠征の一行は、12月17日午後1時40分多くの人たちに見送られて東京駅を出発、横浜港大棧橋埠頭まで列車で移動し、午後7時アメリカンダラーライン汽船社のプレジデントタフト号(14,123 総トン)に乗船、アメリカシアトルへ向けて横浜港を後にした。

この時代船会社日本郵船は、横浜とシアトルを結ぶ定期航路を有していたが、当時の乗船料金は1等2人部屋で310ドル、2等2人部屋で190ドル、3等は2段ベッドだったそうである。日本郵船はシアトルから先を、グレートノーザン鉄道(北太平洋鉄道)と提携してニューヨークまで結んでいたが、駿台新報によれば明治大学はニューヨークまで向かう予定とされていた。



当時太平洋を船で横断するには10日間以上かかり、一行は11日間の航海を終えてシアトルに上陸している。航海中は上甲板でランニングとパスの練習をしたりしていたが、親切な1等航海士の好意によって船底倉庫にあったバスケットリングでシュートの練習も行った。航海中船はローリング(横揺れ)やピッチング(縦揺れ)を繰り返し、その中で時間を潰していたシュート練習が、後になって大動揺を引き起こす原因になろうとは誰も想像できなかった。

### (4) ワシントン州シアトルへ上陸

11日間の辛い航海を終えた一行は、12月27日シアトルへ上陸した。船まで迎えに来てくれたワシントン大学の選手が206cmもあり、ノソノソと歩く姿を見て小柄な鈴木、近藤の両選手は恐怖心を抱いたという。

長い航海を終えた選手たちが陸に上がった時の安心感は大変なものだったが、荷物を持って歩く姿が船上にいるときと同様、揺れに対してバランスを取りながらヨタヨタとしている格好となり笑いを誘った。(以下次号へ続く)

**molten**<sup>®</sup>  
For the real game



# For the real game

「プレイヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」

私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに

世界に類のないボールと

スポーツエキップメント・メーカーとして

つねに完璧な製品づくりを目指しています。

**本大会唯一の公式試合球**

BGL7  
GL7 国際公認球 | 検定球  
貼り・天然皮革、7号球



[www.molten.co.jp](http://www.molten.co.jp)

株式会社 **モルテン** 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川15丁目5-7

